

平成二十七年八月

檀信徒の皆さまへ

住職 笠原建道

講頭 廣田正至

『経王殿御返事』 (六八五頁)

経王御前にはわざわざはひも転じて幸ひとなるべし。あひかまへて御信心を出だし此の御本尊に祈念せしめ給へ。何事が成就せざるべき。「充滿其願、如清涼池」「現世安穩、後生善処」疑ひなからん

(通解)

経王御前には、禍が幸に変わるでしょう。心を強くもって、強盛にこの御本尊に御祈念を下さい。どのような願いも叶えることができます。法華經の薬王菩薩本事品第二十三には、「この経は一切衆生を豊に利益して、その願を満たします。それは、清涼の池にある水が、全ての人々の渴いた咽を潤すのと同じです」とあります。また、同じく法華經の薬草品第五には、「多くの人々がこの法華經を聞き終わると、現世は安穩になり、来世は善き処に生まれる功德を受ける」とあります。今また経王御前も、この経文に説かれたようになることは間違いありません。

立秋を迎え暦の上では秋になりました。とは申しましても、暑さがゆるむ気配は一向にありません。

体温よりも高い気温が何日も続くようになったのはいつ頃からでしょうか。

この季節になりますと、いつも思い出す文があります。それはインドの竜樹という僧侶が著した「大智度論」という書物の中に説かれるものです。そこには、

「人が煩惱による熱で悶絶するほどの苦しみを受けていたとしても、清く涼しい池に入れば、たちまちに身心の熱を冷ましすことができる」

とあります。

また天台大師は、

「智目行足をもって清涼池に到る」

と述べられ、智慧の目と修行の足がそろえば、清く涼しい池に到達することができることを教えて下さっております。

この信と修行の二つが揃うことで功德を受けられるのです。

宗祖日蓮大聖人様が、経王殿にあてて御文でも、「清涼池」が説かれております。この清涼池は法華經の薬草本事品第二十三に説かれるもので、大智度論で説かれる、煩惱に熱せられた身心を入れて冷ますのではなく、渴いたのどを潤す飲み水を湛えた池に譬えております。

どちらにせよ、熱を冷ます役目にはかわりありません。

総本山二十六世日寛上人は、『文底秘沈抄』に、

「たとえ信ずる心があっても、修行がなければ功德はありません」(取意)

と述べられ、さらに、

「本門の題目を唱えることは、信と修行の二つを修行することになる」(取意)

と仰せになります。有り難いことに、総本山に御安置申し上げる、「本門戒壇の大御本尊」に向かい奉り、「南無妙法蓮華經」と御題目を唱えることで、清らかで涼しい池に入ることができるのです。

暑いと感じたならば、その熱の一部は、煩惱から起る熱かも知れません。であれば、御本尊様の前に座り、御題目を唱えることによって、その熱を冷ますことができます。

暑い季節であれば尚更、清涼の池に身心を浸す唱題に励もうではありませんか。立秋を迎えれば、秋の便りも聞こえてまいります。もう少しの辛抱です。御精進ください。

《総本山富士大石寺に登山をしましょう》

『南条殿御返事』

(御書・一五六九頁)

此の砌に望まん輩は無始の罪障忽ちに消滅し、三業の悪転じて三徳を成ぜん。彼の中天竺の無熱池に臨みし惱者が、心中の熱気を除愈して充滿其願如清涼池とうそぶきしも、彼此異なりといへども、其の意は争でか替はるべき。彼の月氏の靈鷲山は本朝此の身延の嶺なり。参詣遥かに中絶せり。急ぎ急ぎに來臨を企つべし。是にて待ち入って候べし

(通解)

日蓮の入るところに足を運ぶことで、過去からの罪障はたちまちに消滅します。私たちの身と口と心によって起こる三業は、法身と般若と解脱という仏の身に具わる三種類の功德として現れます。インドの無熱の池に、煩惱に支配された者が行ったときに、心の中の熱が取り除かれ、「願いは全て叶った、清く涼しい池に入ったようなものである」といいました。彼と此れは場所や時は違いますが、願いが叶う、ということでは違いがありません。彼の釈尊が法華經を説いたインドの靈鷲山は、日本では日蓮が文底の法華經を説いているこの身延の嶺です。

南条さん、貴男の参詣がしばらくありません。急いで急いで足を運びなさい。ここでお待ちしております。

来月の第一日曜日の六日は支部総登山です。檀信徒の皆さまには、準備怠りなく御登山されますようにお勧めいたします。

この御書は南条時光殿に与えられたものです。大聖人様のもとに参詣する功德を説かれております。

御書では、「是にて待ち入って候べし」と仰せです。御本仏大聖人様が、私たちの登山をお待ちくださっている、というお言葉です。

何故こうまで仰せになって私たちに登山を勧めてくださるのでしょうか。それは、過去世の罪障を消滅することができるからです。なにゆえ過去世の罪障を消滅することが必要なのでしょう。それは、私たちが生死生死を繰り返して現在にいたるまでに、言葉や文字に表せない多くの罪障を積んでいるからです。その罪障によって現世の生活が決められていますから、現世でいくら善いことをしても、過去世の悪業を消滅しないかぎり、現世での生活をよくすることはできないのです。そこで、過去の罪障を消滅する修行、つまり総

本山の大御本尊様に御目通りをすることを勧められているのです。

この御文で「身延の嶺」とありますので、身延山に行かないで富士大石寺に行くのはおかしいのではないかと、思うかも知れません。そのことについて、日寛上人は次のように御教示下さっております。

「延山は本是れ清浄の靈地なり、(乃至) 而るに宗祖滅度の後地頭の謗法重畳せり、興師諫曉すれども止めず、蓮祖の御心寧ろ謗法の処に住せんや、故に彼の山を去り遂に富山に移り、倍先師の旧業を継ぎ更に一塵の汚れ有ること無し。而して後法を日目に付し、日目亦日道に付す、今に至って四百余年の間一器の水を一器に移すが如く清浄の法水断絶せしむること無し、蓮師の心月豈此ここに移らざらんや、是の故に御心今は富士山に住したもうなり」

と。大意は「大聖人様がおいでになったときには清浄なところで、インドの靈鷲山と同じである、と大聖人様も仰っていた通りです。しかし地頭の波木井が謗法となり、謗法となった身延には大聖人様のお心はありません。そこで二祖日興上人は富士大石寺を建立されて大聖人様の仏法の全てをそこに移され、日目上人・日道上人と四百年の間一器の水を一器に移すようにして法を正しく伝えてきたのが富士大石寺です。ですから、大聖人様は富士大石寺に住されているのです」と。

私たちが、富士大石寺に登山参詣するのは、日蓮大聖人様のお会いするためです。いまの私たちは、生身の日蓮大聖人様にお会いすることはできませんが、御本仏日蓮大聖人様の御生命の御当体たる本門戒壇の大御本尊を拝することが大聖人様にお会いすることになります。また、大御本尊を厳護する日蓮正宗の信仰をすることによってのみ、大功德を受け、成仏することができるのです。

九月六日日曜日は、残暑が厳しいことと思いますが、そうであれば尚更「清涼の池」を求め、総本山富士大石寺に登山参詣をいたしましょう。